

冊數	番號	部門
一	三	四

近江輿地志畧

六

近江輿地志畧卷之十四

志賀郡第九

膳所 寒川辰清輯

一与多崎八柳候 是大津尾善村正芝ち村主家見
世林多の東側邊の名也柳中一二町許切石築くと尾水
以ぐと竹子より村有柳川ともいひ以て許水柳川ともいふ
田わく居色も無くしげ連りうちせす四細よりと皆柳と
名え柳傍柳大坂の郵詔すち多つて於日吉社曰

人皇三十九代天智天皇白鳳二年三月上已於大津多
崎八柳候在臨幸ちに傳手に与多麻呂ハ与多王立

名々く大をひきまつり二男ニ又の顧命候堂と昂空子乃
お琴とあてひそ周囲もと遠より人なりけりまゝち利
四五の券狀を考へば以ち地也皆左多かはれどもれは世
のくい名をしめトハ仰乃後とはよ左ハ左の仰樹を
もとれどひそすにてか柳とよもじ是の名模せらむ
す事下野年セ本松は多下之敷毛は多様の木
不動川は信乎太はとえ給毛を食ふる事と云ひ種
りと京師の忠田流太極のひひとが既に多子と傳
是たれか千里、嵯峨」と取毛与多麻辰ノ右孫也左
毛女中と號すと鳴年たれとアホリスルハトモツ千里

一
往疏とよふる家と分ひて与多麻辰ノ右孫と云ひ號思
をつて坐して候此四流を念のたる事多は其弟と云ひ
西侯なり

一
山上村　右信乞が山上といひて志望の店の内に此モ
此急忙ゆく沙織のゆこと侍れよ呉疆界詳多ソレ
連々多見之長草山乃舉にて不乃のゆゑ至日即地
のせもよ大なる山あり既て之自縁生上い大比乃
キと山おとす山すよれとね下又林へ立て日
耶能曰天子男依多新道に將太養連五十君及谷直
監主於栗津是大加里子走て所入乃還尾山おと自

謹季

不動堂 山上村を守る太郎の家也。山城山西家ちの事也。
不動滝 長サ一丈幅きそ流と不動川と云申中丈尺許也

水入

清光寺 日朝もく淳也正大寺傳を院のあら

西念寺 は新もく一命ふ而至到ちのあ流もく

山上川 或ち清川也云源字依山也くかく志山
上村の地を以て入之

一 桂明院 三井乃支院もくとそ名古也くひな申中村
後ノれ往に近所暮陽松が建立之

一 郡鐵村 山上村のゆきもくお行徑古を據也
小てむ天皇の御名とばれにて而、いかく御のまくひ
喜び名と經る水たはの極意ことより古稱もくには延
鉄角一五里の間名と稱、ふじとすと移鐵寺の地
きととよ鉄角とすと申い是よりきと頃和名
もく清也に鄉名うて

一 宇佐山城址 宇佐山より移築の西もく宇佐八幡の社
もくといまもくはは左傳の序ニテ四方皆山とす舊考宇
の跡移給り土佐云於本多郡也左傳の跡こしに移給
也く之を承之年庚午九月九日作也時と義昭之書也

京と御近にありて家苑山也と號す事三百年
可計也て是の後長政が食義京を攻め國
有月可成義京の後主居或友兵主鳥及紀田を攻め京
ノ人至其もつて鳥也一統の廣徳也焉
在鳥事既以本來遠寺の名下に於て

一
字优山内宇优八幡社
之山也而此山の名を
後唐之年建寺宇源和宗建立一间四面火神
也と記す之より之の行紀神綠曰

錦織山八幡宮豫州大守源頼義朝臣所創也与州
嘗与錦織僧正行觀有師禮之契每与之會嘗治曆

錦織左
草勝院

元年八月十五日豫州謁僧正之所
而後豫州謂僧正曰余嘗有意願欲創八幡宮此山
公為可乎否僧正曰昔滿願法師者相當山曰奇哉
其峯有靈神垂迹之瑞矣今夫時乎君之所欲甚好

豫州聞之喜氣充心二公乃覓神地携手上山之為
體一峯直上四面全翼東望湖水漫々西帶長山悠
云絕景云實是無双勝境也二公尋地坎彼徘徊時
視一巖上有皆迹又有紫翼鳥來息其上二公奇之
而點其处以建神祠久成迎神於豐前國宇佐宮亦
祭于此矣祭礼每年八月十五日

一 源賴義尼之跡 今いつの紀とソニ事と詳より傳記商承
曰 按大神記及十卷書等賴義朝臣飯伏智證法流
以長子快譽為寺門學侶東征以來信仰神化以三
郎義光為新羅明神之氏人又与快譽阿闍梨謀創
鵠尾八幡又与錦纖僧正謙諸宇佐太神于錦纖山
上以房寺門鎮守家嫡義家亦飯錦纖庄終其身焉
八郎於僧正以為弟子豫州遂館錦纖庄終其身焉
豫州ノハ程矣ノミル或也云程矣而先生今其俗の
遺所の跡ノモレル也ソトは經是草ヘヨリノア洋小
猿石院の事ナリ

一

西福寺

因村ノミタ付今猶有之

一大津舊都 復築村ノミタ付新跡と見テ多モ先は
代跡とトソニ今ノ泉水岩組等の跡在ニ町四万坪も
日下紀天智紀曰、年三月辛酉朔己卯遷都于近ノ
天智天皇御人是三十代ノ事也郎。とは比ト稱トモア
古事記焉ノ名ナシトシ申の故後天智天皇都と大和國
國也ト遷トシ申の故後天智天皇都と名セテ大和の
名ナシト起りて壬申の都として天智天皇大和の
代號也近にちほみをくまノ後と並ひの名ナシ

事も國名の多からぬ故に併々多矣とばせまし
俗人の天皇帝へ奉りて、其事は紀セモを甚
非く仕合をもむち迎ての御朝して早ハ平洋ともし
とても深舟好く云布麻のれとさんとてもいふのみ
とく御殿といふして、龜印タツシのくようちゆ
名主も少はん小主とさわせよサガニトキミテ
ウトトロおもふ帝王のあらわの景致やどもと
上所の宇の上下と是へたふよ日影判丁この
點より年月を定部と達ひ以來國クニリ
遷都を今ば北の田頭となり終ニ町四方の七更

了承の跡シテす又内裏の跡シテ之シテか
て行天皇の跡シテ事實無なましくて、故に城内何ぞ
めばうや物換星移シテ田都乃疆界小内裡の邊也
も不考事シテ也。書寫シテ行天皇には下を彼様軒
義石室の跡シテやせそもく大佛の部の内牆事シテ
有也。三井の北に内裏シテ西面す也。案猶
幸くと建て、と記せば豈富子の爲跡シテ世有め
而五叶もくらむを度とんと見せば是内裏の遺跡
本シテまくや蓋今か一もんや奉る又モ原野義石室
の跡シテともいへ後も考と行えども考て全紀四十

辛土自丁巳矣、近に宮從大倉省覽、三倉出云々又曰同
季十二月癸亥朔乙丑、天皇御千近にふくし方至る集曰
遇迎はる御内歎一首極む人廢

玉手吹畠火之山乃樞原乃日知之即世俊阿礼座
師神之書櫟木乃繼副爾天下所知食乎天爾滿
体乎置而青丹吉平山哉而何方即念食乎天離夷者

師神之書樺木乃翁継副爾天下所知食乎天爾滿
体乎置而青丹吉平山哉而何方御念食。天離夷者
雖有石之淡海國乃樂浪乃大津宮爾天下所知食
兼天皇神之御言能大宮者次間等雖聞大殿者此
間等雖云春草之茂生有霞立春日之香霞流モレキ

拾遺集

梓人麻

はるかに久のまち名のこしてあたかひとよ木とくら
ひりゆう袖を濡れ少浦やく津乃とすく白山とくら

卷之三

卷之三

卷之三

志賀公圓 是ち今も餘りてはるに
之處也

もとから原了郎の時からも海國行より無事のちま
るを一ヶ月ほども見てたうけを取つてゐる

毛角を留めても固らしく、手の筋を引ひきほぞ

乃年正月

續隱書集

土印門流

あまうるくや や用ひてゆふへんまくわらひと志賀の山國

之をも

すすむは波乃島ひひまて首をと一志賀の山國と

をも

うけとみをめぐらと名をばすもこの雪の山國

主二集

多羅

御大の國は、ゆくゆくの志賀と源を家せの志賀の山國

千載集

祖郎成仲

御大の國は、ゆくゆくの志賀と源を家せの志賀の山國

千載集

猪玉集

猪玉猪や、猪玉猪も夢をくもぞひし、猪人の山國

猪玉集

一志賀庄 猪藏の内に山をもあらとつもるをと山壁を

猪玉集

山之手村刻立翁村、少翁とて山を打たぬねと

猪玉集

あそとし、もと花の枝れき邊にのと壁の山國

猪玉集

一正光年 西之手村とゆちえを山打たぬの山國

猪玉集

一舊主守邊址 菅延唐年とよ庵く一度居しての山國

猪玉集

一福主守社 西之手村のかくゆくお伊紀やまとを

猪玉集

ノシトニモ應ニキ再興シテ賀之監曰其一ハ福主
初紀貢之シ萬物仰摩冠立臣土列日錄經林山國風
僻寄精爽枉被人呼王子神ニシテ福主ニシテ名傳の是
ニシテ志士と謝御食古ニシテ祭古ト也方外の支那
勝尾主の湯古ノ所リ日暮人因跡を能知矣ト又く
勝賢古ト而賊古不の所シル者多有之此くも上大
社明神の神也ト是又云先く是明之名抄
石哉ヒシナリ事多見之紀貢之シテ本昭和一村ノ傳
社の事アリ記ハ頃碑主云活躍の事福人神ト云小村
ウノ是別紀貢之と祝ひシ社古トニモ主とて

ノシトニモ應ニキ再興シテ賀之監曰其一ハ福主
奉甲辰十日生シテ年三十一年也アリ。卒享平年三十
蓋山隣名筋也。勝勝乃奉を継ヘテ終後之を葬
芳集後乃シテ祀之ト祀乃シテすゆトシ。

一
新在家村

一大伴明神社 創立年不詳民家ノ内松乃後元
子山鷹ノ石堂大はまつた事門傳祀神

錄白

黑主近列志賀郡司大友都堵年麻呂之子寔大伴
列躬之子也弘仁天長歌仙勅集呼曰大伴黑主後

人崇靈建廟於志賀庄云々本朝避史曰志賀黑主者
与太孫也又云者大友皇子之子而創造國城寺曾
賜大友姓其子都堵牟麻呂而後大友之字改作大
伴也黑主之國城寺亦自与支而連綿至於此云々神
社啓蒙曰大伴黑主社在近江國滋賀郡辛崎邊所
祭之神一座トヨ・鴨若明せ名抄曰志摩御ノ大通カ
カ一入山際ノ黒主ノ御神ノロソアリ毛豆ノ
黒主ノ神ノシカラレテ大伴毛豆ノ御主不_レ代
蹟引ノノ少神ノロ皆生モ様多クシテ_レサ名抄
乃言を以て考へけよ比叶シ竹是之は福王子也弥

考之ちと本紙考る事云のほ人所門ノ取扱事と之え固
傳承の地主ニ志賀黑主ノ世人云々仁明ノ比叶カ
更卒乃比叶カの人物ノ和焉威徳相沿ふも黒主の事
アマアリ 又云別移移紹和すも黒主ノ廟あり
念佛寺 新左衛門持主
見世村

称念ち

又新村ノ御守主を御守主を御守主を御守主を御守主

正八幡社

又新村ノ御守主を御守主を御守主を御守主を御守主

志賀寺遺址

又新村ノ御守主を御守主を御守主を御守主を御守主

九月四面布多より移行至善薩へと云是も一ノ谷のゆく
通勤その途をとるより車と軽きもの跡を高瀬
輕橋の跡を走りて車と石佛川源流に大サカ万
许土俗とをもどす水向川移かへて云々下に船ニテ
毛乃路と云ひてはりこの中の平流川四跡多一見皆
志賀山中の四地へと志賀山中の別崇福ちと号セ一年之
清少納言枕草綴へてすと志賀春曙抄へと志賀と崇福
ちと号の長等の手とげた筆とと御名トハ雲霧抄

月清集

國史の事也、崇福寺と考る。移日一奉二之
續日本紀曰聖武天皇神龜十二年三月壬辰
到志賀木津頓宮乙丑辛志賀山寺礼佛。額裏國史
三十一曰弘仁六年夏四月癸亥辛近江國佐賀韓崎
便過崇福寺大僧都永忠護命法師等率衆僧奉迎
於門外皇帝降輿升堂禮佛。元亨釋書曰崇福
寺者天智帝初欲創伽藍求勝地未得七年二月
夜夢一沙門奏曰西北之山有靈區帝俄寔平時四
更也使出殿陞望西北火光細騰高十餘丈明日勅

侍臣物色光所侍臣及宮奏曰光所有屋廬傍樹渴
布有優婆塞經行念誦臣等同名不言其容儀似非
常人帝聞之乃幸具地優婆塞出迎白帝曰此地古
仙靈窟伏藏之处也言不已不見帝感喜立精舍
續日木紀曰聖武天皇天平勝宝元年秋七月定諸
寺墾田地限大安業師與福大倭國分金光明寺四千
金光明寺寺別一千町大倭國國分金光明寺四千
町元興寺二千町弘福法隆四天王新業師崇福建
興下野業師寺筑紫觀世音寺寺別五百町延
喜式二十一曰凡東大興福元興大安業師西大法

隆新業師崇福招提本元弘福四天皇崇福東西
法華梵敎等僧尼每年自四月朔日迄八月晦日食
時便於食堂各讀大般若經一卷又曰凡崇福寺每
年四月十二日悔過各三日其僧當寺之供僧八口
三絰一口咸僕師若從僕師一口並以次第詣其布
施供養用寺田地子物江次第曰天智天皇三日
延喜式曰凡梵敎崇福西寺僧耕綿二百疋每年九
月五日以前送之文德冥錄曰齊衡三年夏六月請
名僧二百六十五人於東西寺及延齊掌福梵敎等
十四寺譜所寫一切經各三遍限七日訖三代冥錄

曰清和天皇貞觀八年閏三月十日乙卯應天門火
延燒接鳳翔鷲兩樓二十三日丁卯於崇福寺請二十僧限以七日轉讀大般若經於梵教寺請十僧修四王秘法限七日此並此消災變也同四十七云光孝天皇仁和元年四月二十日甲戌天皇於延曆寺東西院崇福梵教天與寺立寺各請十僧始自今日五十日間轉讀大般若經賀大臣經滿五十筭兼祝壽命也古記曰智證大師記云崇福寺鎮守者以三尾為護法善師也高僧記及灌頂詠譜等所出寺門高僧崇福寺別當職者大僧都禱範真如前大

僧正增答一來寺聖護院阿闍梨勝覺完成僧正覺宗羅蕙前大僧正行慶平掌高僧記第十曰延長五年崇福寺彌勒新像開眼供眾是日天衆聞空佛殿金光耀天紫雲縞覆見者多發菩提心供養尊師東大寺延敞十卷召載天喜五年崇福寺供養願文其辭曰蓋開崇福寺者天智天皇所建立也倫狼後峙遙凝鷲峯之雲虛祀在自得警池之浪勝形於天下靈驗治于衆中草創己來星霜易積爰去天喜四年佛閣火災矣奉造金色彌勒像一龜並燭士菩薩二軀總如本願碧琉璃壁映山樹以照耀朱戶畫梁混溪雲而粲爛使曜

宿敬奉供養伏願金輪長靜王燭鎮明仙院后宮文
武百官七道吏民住長生之域悉登不死之床乃至
無邊法界普以利益敬白天喜立年十一月三日云
或記曰醍醐天皇延喜立一年辛巳十一月四日崇
福寺炎上是始也自天智七年建立
当二百五十四年延長五年丁亥十一月

六日供養村上天皇康保二年乙丑九月正日炎上
後一条院治安二年壬戌月日炎上後冷泉院天喜
四年丙申月日炎上翌年丁酉十一月三十日供養
白河院永保元年辛酉六月九日本寺圓祿之時同
燒二條院長寬元年癸未六月十日本寺圓祿之時

同燒今楠木に後宮御より移して第一にて
因御すとす今之三井寺事と因御る多ト
ノ氣に兼てん物語曰三百之御のは勅すとすアセリテ
ばてお天皇の御と天平清立八年參詔ノ正四傳下
稽經寺主長慶公ノ御いはゆるととおと小もほれ
ナノカツハ、いそくてもよ

一
梵釋寺遺址 今モ遺址ト石碑名ト國史文原丁文
載といふこれハ室獨子のをとそ(?)定くばら
為(?)傳言を主爲す了不考矣隨くそ(?)類裏
國史三十一曰弘仁六年夏四月癸亥辛近江國滋

賀韓崎便遇崇福大僧都永忠護命法師等率衆僧奉迎於門外皇帝降輿升堂禮佛更遇梵寂寺停雲賦詩皇太子及群臣奉和者衆大僧都永忠手自煎茶奉御施御被即御船泛湖云高僧記十曰桓武天皇依御名願建立梵寂寺皇子之昔與參議百川相謀造立梵王帝寂二天像各長五尺等皇子之身此所登極也踐祚之初延曆二年癸亥建立梵釋寺安置二天像云日本後記及日本記畧曰弘仁十一年閏王丁卯先是鑄銅四王像於常住寺至是功成遷近江國梵寂寺云統日本紀三十八曰桓武天

皇延曆五年春正月壬子於近江國滋賀郡始造梵寂寺七年夏六月乙酉下總赦前二國封各五十戶施入梵寂寺云額聚國史百八十曰延曆十四年九月己酉詔曰真教有屬隆其業者全法相無追闡其要者佛子朕位膺四大情存億兆尊德齊礼雖遵有國三規妙果勝因恩弘無上之道是以投山水名遍草創禪院盡土木妙製莊飾伽藍名曰梵寂寺仍置清行禪師十人三網在其中施近江國水田一百町下總國食封五十戶越前國五十戶以充修理供養之費所冀運經馳驟水流正法云同曰丙午制崇

福寺者先帝之所建也宜令梵敘寺別當大師常騰
兼加檢校云々 終日本後記二十曰仁明天皇嘉祥
三年春二月聖躬不豫甲寅下知近江國禁斷殺生
緣梵敘寺修延命法也云々類聚國史百九十曰弘仁
六年正月丁亥制東福梵敘二寺者禪居之淨域伽
藍勝地也今聞道俗相集還藏佛地斬馬率牛犯汚
良繁宜今近江國歲加禁斷云後悔緣云々梵敘寺と
日節寺本ノミトニシテノ暮殿ノモハニシテノ後
悔源釋名一石可付ノ日等の梵術も因名別至多
一 家陳寺 土俗是山ノモハニシテノ是山ノモハニシテノ後
殊ノ

非トシテ降ノモハニシテノ土俗ノソノシ義陽和也の建立ノア
後悔名也幼庵焉如院等ニ又因ノモハニシテノ是山ノ古跡
一 晁盧谷 宝徳年ノキセ始恨谷トニシテ義陽和也而以別
混盧ノヒキトニ改名也後考久ヒ^{古カ}曰せ此重は後考化完
滿而況久矣少作修曰晁盧編一切虛忠國師曰禮故
謂遮那項上行我祖弘法大師曰七室上見地獄皆
言此耳云々

一
志賀古義功 仁二年四月廿一日
トニシテノ後考久

一 玄孫大帝神社 玄孫社ノミコト神乃御

一 正八幡社

是と多御ノ清ノソトニテ御マトホメ高土

神ノ上多御事奉ハ月ナリ秋トニセホメ高志

協行取事アリモト度モ御行キ車向高志ニ歴

多御事御古トニ大御ナシモト少ヤ古の争乱トホシ

元い御シシメサキ少氣トシムアタマノヒトハ月

ナカニ必疏モ足並行トモシキヤガラ利

後アト古覽曰ハ幡主院モ己未年四維久周家

禍乱ノ日暮院ノトシトノ霧代様ナ吉良ト有

チニ多御事ノ後高志モ高志アシサヘリ數多シ

跡附郡小津大古神宇代解ロトスモトモ吉作
國翁園店平多子トシテ行方トシテナシトナシト

事不ノ御

一 大五郎 玄孫社ノミコト多御事御行キ車向

多御行キ多御事御行キ車向高志ニ歴

輿地志畧十四終

近江輿地志畧卷之十五

志賀郡第十

山中村　志雲村の松原をまわる　おまめの山やも　一
はらのやま　とまよし　ほく　二月　とまよ　ほく
移ふ野　と　山　深水　と　林　高　と　佳氣　と　世　と　と
平　と　峰　と　絶　と　志　必　ば　也　と　も　う　ば　村　と　西　路　と　傳　と　二
佛　と　歌　と　は　大　石　と　是　え　傳　近　と　お　自　の　寺　と　一　経　と
寺　と　一　佛　と　傳　と　久

一山中故是易之也。至于平生（知麻所）甚

路山中をまよひて原野の草木の名をうへ或ち今遠
敵とも云ふを妙と能く其ての餘りに立候事も云
事中を東塔にて宿をばおもむらひりへりく徑をま
笑ひ山城とよき處をより通じてかくせ山城のすき
やま城の傍下にてりあはる宿しゆくわくを甚
やかの山城のをゆき後世ゆくとて元氣が改めふ
ややかの山城の後世ゆくとて元氣が改めふ
今後城とよきとよき嘉慶比士ニ集
もひいにれひ人の袖とや水としなれ因寺のさきの今を
といづら是とぞ平紀のを送致してテ乃其事と致く
無事とぞもひいふとよきも槍一とて今西古道

秀吉の勝負をうなづかん人を頗りつせずくそ
逃げりとまと云ひての今をよしと祝也々祝曰文晴
本年四月八日自石山の自少や細雨下り宿一三事
准行は店を二十三十五毛物曰佑木本多大丈義堅と
ちり二十尺三万六千枚倍と半一時元一力と合せ
と上落とておはねおきとおきとよきとよきと
ば今通稱とは改め候あくと間又一里間又あり
五里餘

一 善光寺舊地 おほの峰岡をすむ家憲守れ墓室上人
者也と云ふてあと通りりをもてられ年中

宮傳より仰承さる今の宮傳あれども是は切ひを
うへて圓善先生おぞととえに比地回爐とあり

一 志賀山 岩山のあへ三井寺をよのむと云ふ事
うと長年もとまし又を御守り山とすれどもとよ
半井の三井もゆづりやく巖山すあるととましのと
志賀山の名徳名と號す事一と云ふと後りア中
谷と云ひと今持林様もと長年の山稱とはばほの
事ととて之と一五〇限ノトハ六十五
さへはやあまの山故の所から事り人持林ツル節と
一 山井遺址 岩山のやうと云つてすなは其遺址席

秋枕曰是只在山と井と安積山等有く但範兼郎新栗山
瑞國入へて或名所五十首會為る事と出題山城近に有
名紙被出く内迫山固今在く正在所行處哉可尋之山
井漢者別处歟

古今集

音文

往くものと仰く所陽山の井のうへし人とよめりト
ちと志賀山成して石井のとよめりとよめり人のられ
多御子に清き後醍醐天皇ヨリ御時も志賀小京
ヨリテ多御子奉充と申すとよめりとよめりとよめり

身の如きはあくまでも井戸の水を汲む者耳
一志豈博　たゞこの間もあつて御の陣もあつて云
う況りとておれどもおのをせば何をいそがす。當に
來らむやうの如なるを知るにあらずとぞとぞとぞとぞ
我より我より隨體ふ作

萬葉集

草枕羈行君半愛見副而曾來四康乃瀆邊卒

同

神樂浪之思我津乃白水郎者吾無二道者莫為浪
雖不立

後拾遺集

快鏡

四

少佐をもつて、丁度水をもとまくたる所がわざうみ

郭古今集

さうして志摩の宮代ゆきとおとせとおとせの日めし

正清石齋

後生の所為なれば、又はうるさいので、我をもつておけり
一大田中　志賀の園西とよとよ

万葉集

人麻呂

佐散難旅乃志賀能大和太守柿六友音人二赤母
相見八毛

類聚名所集

長明

為尹千首

為尹

之子は此而來多きいゝる多きのちよひのう

繞古今

葦蓮

少人の汀乃冰踏なましにきどぬれ忍びくめ大また
一 韓崎 或々可樂考或々可樂考又々唐考今のまく

作日吉記曰社勢上祖琴御館牛志九宿神自常

陸國麻嶋上洛江州志賀郡三津濱居住之號之
唐崎云又曰天智天皇白鳳二年三月上已於大
津与号崎八柳濱在臨幸于時湖上漁舟在田中恒
世者神命恒世便送于唐崎松ノ下ニ於船中恒世
供粟ノ飯神甚有喜色曰自今為汝每歲卯月中ノ
申日可為臨幸于唐崎汝及至子孫必來于此地神
ノ詠曰

川となく鷺の高根に月の光をやすすむの有り
尊神与宇志丸座石上尊神曰於此地可為鎮座但
可求于勝地乎否琴御館答曰於此唐崎之湖上且

色波起有一功衆生悉有佛性如來常住無有變易
之響神詠歌傳寧志九

大体の三はぬ清よとナニシム事も御の御承りを
御候の曰君自何地有臨幸乎神曰我自和卅三輪
來奉言可現神妙之奇乘御船上松ノ梢宇走丸見
之言自是當乾山下有勝地伏願有神幸我又從御
跡尋上可奉建神宮尊神忽然去從唐崎至比叡過
浦ノ島御船止に北上先御正四位上吉野ノ御
祝於水引丸ノ御ノ事也御之御之御之御之御之

參詔、票印傳付と傳記。伊勢と御事の事也。
仰々書乃自序曰元龜二年辛未九月廿日早旦儀
田彈正惠信長燒山上坂奉社碑記錄惠為灰燼然後
天正立丁巳年三月中旬於伊香達鄉新記之。是此
之れハ教誦乃記述ノ事也。後序一也。一と云者皆く此
と總じて後考ト西テ多色枝葉拾集。燒竹乃紀也。
日吉乃鳥紀ヒ芳乃ぼくあるをぞれ以テ之に觀かゞ
先志嘆慶稿の印。幸也。傳付此乃と。印雲乃傳社
と蓋傳付と傳付とは。蓋枝葉拾つちり。之宿根也
。多くひとよだれと。之草作もと。又曰天智天皇

事務の行幸にてまことに仰せられ候事御體あらへ
御門を近づけと申めども御免されいかんの
御門詔書とて義理御要事皆既にかくはる
大伴のうち臣候と申せばはの行幸事とも
之を承り候ちんとぞ此御託を山河乃清和
と申ゆ是れとすと千をふ仰せうすと申候
端々重ねたは候事と申まひの事と申候
在て天子の御幸あるべくおまへ

樂浪之志頤乃率騎雖有章人嘗人之船麻知兼津
日本紀畧曰延喜二十二年三月乙亥章近江國志頤可樂
騎

續編國史三十日弘仁六年夏四月壬寅孝子迎于圓
道が韓碑をしめ亦七瀬坂の二所に亡骸と云ふ少七
瀬をとせんと云ひ又七瀬と云ふ事多傳乃也
峰の七瀬をすくいむせんとうち難波田蓑嶋河後 以上
橋津國 大鴻 橋小嶋 以上山城國 佐久那谷 享德 以上近江國
是とあせ瀬を大七瀬と云ふ公車坂源ノ集釋并詳多
若船後の事也 于今如年二月の六日より數日程不
知其事を尋ねて女郎高社の方をまじめ船の上に不眠
とぞと源氏舟宿のしゆる庵に曰けむハアシテモモロ
のかく船の多くを花名修悟曰前有嘗歸京之時於難

以被有前有院退ぬく時於辛崎候後うし其地の夜雨八
重乃号一五

美葉集

八隅知之吉嗣大王乃大御船侍可將憲四賀乃辛崎

拾玉集

慈鎮

新千載集

人情正義

かくもやけりれを事ほくと改めまし物のあやうむよ

拾遺集

年祐春

送秋至是年結之於河と綱と波のノケリホトニシテ

佐撰集

かく傳の福と草とすまきむかほけれどもすら夢み

あくと書ひて不そとぬ年華一 大徳黒主

何せ草小つれ乃生糸絶とぞひんか御川引ひを引く者

祝部

行成

古ヘ不神ノ傳承承引ひし猪の子乃かくらの猪

望月正首

近江乃海舟も立本傳とおもふを達辛崎と云ふゆゑ

圓清集

後寫

終焉やをのと山より日乃水をかくを喫乃夜矣矣

布縫や大富人の清水清一とをく詠しより利

一 唐崎古戦場 後砲破天皇山門塔の以新田是利也

而し草木た草地と詳る)

一 女別當社

(先祖傳大聖社)

日吉社曰唐崎女別當社口傳

或り松の種付又祭御坂の事(種付御坂之子)松庵社
曰大吉御坂の事(御坂)人定年代御坂(御宇
坐之)行丸日吉神社曰唐崎社(太己貴)今日吉大
比叡の神御顯の坂(石井井伊藤と名を有す)也お前人
主とちはひだり者(御子)と云ふ事(御坂松庵の社)

詔書引古編毛利松翁見なりと左大臣一と男之女
左二月正六日(ノ)晦日よりて男女多くはて詔をば弓を
清手洗と小玉人花形の宝物と剣(一筆)と玉と左詔
書了を詔書毛利左大臣(ノ)右(ノ)月(ノ)日(ノ)年(ノ)月(ノ)日(ノ)
御(ノ)内(ノ)外(ノ)御(ノ)内(ノ)外(ノ)御(ノ)内(ノ)外(ノ)御(ノ)内(ノ)外(ノ)
詔(ノ)人(ノ)大(ノ)事(ノ)事(ノ)事(ノ)事(ノ)と是(ノ)事(ノ)事(ノ)事(ノ)事(ノ)
事(ノ)事(ノ)事(ノ)事(ノ)事(ノ)事(ノ)事(ノ)事(ノ)事(ノ)事(ノ)事(ノ)事(ノ)
事(ノ)事(ノ)事(ノ)事(ノ)事(ノ)事(ノ)事(ノ)事(ノ)事(ノ)事(ノ)事(ノ)事(ノ)事(ノ)
事(ノ)事(ノ)事(ノ)事(ノ)事(ノ)事(ノ)事(ノ)事(ノ)事(ノ)事(ノ)事(ノ)事(ノ)事(ノ)

久跡と同く。甲斐より望むる山川を
ありんと思ひてまことに思へておらず。歩
きかねまつり。宿泊の旅館もやうまい。
それ天狗^{アメノコ}だ。まよひとゆきとゆき山^{アメノマヨヒ}。そのれ
いかでさまで年たまつる山伏^{ヤマツル}。行地^{アシキ}
年じいの旅館^{アメノマヨヒ}。山門^{ヤマゲ}。井手^{アメノイ}。ま
え山^{アメノマヨヒ}。都成^{アメノマヨヒ}。以下^{アシキ}。獄^{アメノヤク}。乱^{アメノラン}。井ち
ちとけく燒拂^{アメノヤハラフ}。怪極^{アメノヤハラフ}。來^{アメノカム}。もあ事
あく佛國^{アメノボククニ}。大夢^{アメノタマ}。かくとゆきほくとゆきを書
よおやく。佛師^{アメノボクシ}。勞田^{アメノラウ}。陽^{アメノヒ}。身^{アメノカラ}。を捨て空く
よおやく。

宿院 日記曰。是彼乃る所引之小原房春居

自神幸之易はと遠之う、以少慶焉もとアハナ
少慶阿と云化ゆ

一
一ツ書　墨石記曰社勢上祖事ニシテ宇志丸宿称自
常陸國麻原上源は弘法寺也之傳演石經之是之
唐房於麻原樹松名ニ致陽之松時代矣之平五代師
昭天皇乃御宇之日本國總集曰辻志賀唐房乃
一ツ書ト々每々願只言セリ事と計久保了了松
木系一荒木也ニテ或シカモアヒテ事候乃松
ち一莖アキモアヒテ有無一キノ松也人せざ
一ツ書ト々モアヒテ有無を減レタリトテ日本奇跡考

曰辛夷一ツ書ト一立てふの謂イハシヒ松モ一莖
若ムアキモアヒテ江源武備曰唐房乃アキヌ姓
多乃希ミセヌ多ミト伐採シレバ松ノ乃義郷名某
乃絶人手を絶ヒ志賀乃百姓考之御ノ山門無動
山ノ空を移シケヒテ松ノ乃別廟山神ノアヒ
速立トシテ阿嘉郷の如く

八代以降只唐房のシテ松ナラ松力も雲原もとも
シテモアヒテ唐房乃近ちア義郷トシテ有りに源成
鑑ナラアヒテ後事也俗語ナラ一書曰近江正良妻故
孫女一樣あり松の事一ツ麗のたくげなく一松ト

多々草木二計之針立計乃至も之と
一計を取ともすと、唐崎乃處の記云天智天皇乃
御宇にて氣之天正九年乃太祖之靈ノ松倒れ
して松底直敷とて、今根を入松と植つたし
そは乃人志の致也

お湯川より五年後、唐崎乃松といひてみを多め
て扶桑拾翠草二十六番蓮院寺の親王唐崎乃
記曰け事もいはゞやの松倒れりて、そくもあ
くらゆるほ幸ノ神感も本總御了松とぞあり
アリ新庄源氏の直敷とく文氏姓工正とぞ五常

もあつて、ゆふ人をすがちや太津の博郭と於
高木村とて、松彦玉野音西壽と
いふとげの後見とておそれれ、被松乃年もく
怖く方野ヤソと裁くやく、少子の考とんじん
情うねいじかくして、名ノルがくじて場東
極れ迎えに持をひい抜もげりて、名ハ往來
乃くも同とくのみひきをもくぢく千峰天正十九年
卯の年の春の内乃まくのす、さかうなまく一とえ
かくすとく

於のつるみ事とて、唐崎乃松ひまくもとまくせ

も今一一向のひそよめの根で、そもそもすゞり神
意をかくらひて、信託すとき天智天皇乃
躬く極本初と記せしも、称宣行九日后
詔を以てアシヒノ御明天皇乃御ニ社務の元祖
事は彼空志而て、一牛と云ふとモ唐指
已と申す天正十九年辛卯の御彰定玉移すモ極本
事の、扶桑集水戸芦門云の編輯して至れり之
に源氏體の迄もむ益痕接と云ふ在者云々今之
唐指の名と別種村の山と求むるゝと云彼天正十九年

の秋乃半加令ト一木草細曰松乃、
五鷲立鷲七鷲立時珍曰有二針三針五針之類、
如此ちあれ。一針を不載多と臣也奇」と勑勢
乃服布師ニ越の附子と韓傍に引記寫之を又
御一針(ちよのひ)皆二針ヨリテ年常の薬
ニ蓋被錦明天皇の医附(いふく)ミテ松も一針年常一也
不詳今之松も稍高(ひく)只枝葉四方に繁茂(はんめう)して七間
四方許しや而も(ひく)一木立枝葉も以従事すト

拾遺集

李家

我らも若き頃は本の松

唐崎やひきとさくま砂地アサヒモヤモミヤモの松
吉玉集云ひトヒエテ松原ノモリタニ西奈道遙尾嶺を
カケルヒテ良ゆシヒシモナシモナシモナシモナシモナシ

花乃後ナリモリトサキノカクシモナシモナシモナシモナシモナシ

臆地 岸野乃モニシテ猿地也トシモリツツツツツツツツツツツツ

流も韓崎の二町洋もテ曲ガリテ左ノ源也辛崎
乃社ノ傍ナ湖入る川巾一間モリ

穴左村 志賀毛場村等の東ツヨミ村ニヤミ穴地
ヨリ正史ニかつて平記ノ定生ニシテ左ノ端を

一

穴左村

志賀毛場村等の東ツヨミ村ニヤミ穴地

づー村ノ成を別村ノよむも穴を内ヒ村乃
内禪納社の前ナ小の川傍シテと新町ノ穴を村
伊ナハ十町もヒ村乃玉人乃地と萬人名ナリ奉
土産アツツムヒテ跡の文字ニ作ムモノ渺々

穴左松原 猿地の少一町モシテ曲ガリモ玉人乃
猿樂也而源の田村の曲ノンモ河邊松原と云イ伊勢
國の源原の松原也石是矣矣

一
志賀舊都 高穴地のあくまけを源ノ曰松乃跡モ
穴左村也白居乃遺址か一日布引を拂モる系行
天皇御代ノ郡と建ひと年テアモリモノ成勞

天皇立千年皇后とたりもし仲哀天皇一年壬子
都を移り立つて高本記曰奈所天皇五十八年春二
月辛丑の朝辛亥辛丑近江國居志賀三歳是謂高穴穗
官

乙卯前水 穴左村の上ふるとお傳首養源院灌頂水
用ひて歸る處山大慈坊阿闍梨聖昭がくを施てばと
願ゆるに接するに聖昭を密山なる穴左流の元祖なり

石佛業師堂 穴左村と傳教大師乃作之と云
禪納大明神社 穴左村と所尔日吉客人のまこと業
禮毎年五月廿二日ノノリ

一 庚申塚 穴左村と杉一株有モテテ庚申乃小堂立ち
庚申の事と甲子の庚申乃隣りの所

一 宝光寺 穴左村とえも如堂と曰ひて草河原地
佛蓋治東のもの如堂と曰ひて治東まへを
乃祖起曰む尊ち慈尊ち師のまづと云良年中而て
紅刈志賀郡苗原の神ニ對面し立つ年も四神の妙
木に柏の木ノ屋あも是を立附く機り、大師と云と便
坊に移りよしけ木の伐り立つ每朝光明天を以て師
経立ち刻々アレアレと一片木は庭園乃佛跡一所度
立像乃佛跡鮮ニシキ血多あり如一せ後後代

日吉乃神の尊事と大師入鹿御朝の後一刀三礼
にて行長と守護品如来即の平南寺の御もも之
を後主地と仰し承く年月を経て蘆山乃常川を
之を多と大師入滅の後円融院の法事承觀二年甲申
乃至蘆山の住僧戒山上人の多とを便あくと曰家
之を左仰きまく事もと市井に出入り一切乃群生を
利益殊々女人を度むる事一山乃名流
のくまりけ本度く及く是若以て山ノ一山乃名流
を折くけ事と被る事と云ふ事也又西坂乃林庵也再
び乃化きに極てす後治來神乐國ニ移り應仁二年

八月予遂北上候く西壁の里合ひ多うと有二年三
月アリて元大、一、物候多候むる多見多うと云々其後
又は東へ遙に因くばとと莫如モソテ
一、國充亭 定を付くを清よほや妙の亭の事也
一、御所跡 里利將軍源義勝の跡は少方義輔と多
矣と云好名義能とそつ抜て修む義勝と義貞と云
月方ハノ跡と遇り仰く仰く少室の跡も修む
故あめ多矣と云ふと詮して亦多くて官たれの跡
也一里をとねん多ひ故退居の跡跡をかずす
彦者アヒテ五丈十丈年中アリテ文石穴等

かくへ堺にて西行院勝山四三十九士と渡り辛苦
多事嫡男率相手將義高(後改義平)安久と通じ比叡山の
豪傑も少ず。細川時元が本定をもとて洋院
を祀る。

一 盛安寺 わくよかをもぞうせと一盛安寺
トモくわくらは色佛にて王名を坂本西教寺
の主と即ち慶上人の墓前七十石を斂む
毛利朝重を以て剣と拵た殿うそトシ
總福寺 慶安寺の南にそびえ十一面觀音相傳
日向谷に御在所す。主佛うそとよ奈庵

王及三連川の続

一 白鳥城 定さざく山城修了手代くかく修う
二里移ふく馬蹄山へ、山の北側とあつてもの
跡者山の東側を壇山の西側とて白鳥山の
東側が歴々紹述或ち古跡載ともより上古は某
うゆく今跡と云ふ(古跡の名)

三
近江輿地志畧卷之十六

志賀郡第十一

一下坂本 韓崎 トモヤシ少佐の町の入と四ツ家
町と上古ノ経ノ家に引カニ左の名くまほと柳町
と云は傳ヒセ木柳の名と主政を少府管門
毛少府管門の名もと主政を少府管門の名もと
柳ノ下りと堂ノ前也と云是今ほその名もと
以テ主事よ又や東川とゆウと大通河と云
足少府管門の名もと主政を少府管門の名もと

のうへんをうけたまふ。おまかせだ。おまかせだ。
まくは傳てまくは傳てまくは傳てまくは傳てまくは
まくは傳てまくは傳てまくは傳てまくは傳てまくは

割之多家多一也。其後甲子之歲，大旱，其
邑井水涸，乃易鑿於此。嚴近之。

先長の蓮雨守
レ故本甲申之年貞和三年建立安生
の。近体を墨すの自作之相紙は既にト甲室因身更
山の善光院と善光院の門脇と云はば御子向
く廻同一様か。耳が小名も土人云は小名も口せ
巖山遊子のひ萬能の也と。此行の後、其の安
生にて勢く修て干川日出彦高一と云ふと終し御子也

まちがえで、及く除かれて、事なかれ。後世の御代
田の御、御役のたゞ人間の、御田の御と實つて
御の様と傳へり。因て、西五ヶ岳の山々を
土俗田牛の高祖と仰ぐ。蓋は、今大隈本義の
あらわし。

吉原井　名水たまきとおはなをもつて赤井口
名あらえも千草のほんとう

上條本大將軍の社と勧請する所

柳の邊にさしかかると柳の枝と

かへて植へる日吉さんのお葬の所はさてお前御と
まちうえ年日吉のちよと多き爲ひ柳ノ庭より事務所
事もおせむと厚く上ほゆるの多くあるとぞ
モトモの間の柳と植へばせと柳や
とほいとも日吉の田舎には小韓流八桺の庭と有
れしもあれども之を柳と名すと云ふと今
多きうちのちよの神靈は此と云ふと云ふと
傳へり單々亦然りと云ふと云ふと云ふと云
なうるゝ近々に事や大活水とツギの氣流例
とほたるなり

一

長善寺

柳叶の葉と白ふ草を移す事無

一

信教寺

草葉の葉と白ふ草を移す事無

少彦町の少彦町の草葉の葉と白ふ草を移す事無
信教寺の草葉の葉と白ふ草を移す事無
と云て少彦町の草葉の葉と白ふ草を移す事無

一

東野寺

柳葉の葉と白ふ草を移す事無

一

大通寺

柳葉の葉と白ふ草を移す事無

大通寺の草葉の葉と白ふ草を移す事無
と云て少彦町の草葉の葉と白ふ草を移す事無
草創新通佛と云ふ事無と云て少彦町の草葉の葉と
白ふ草を移す事無と云て少彦町の草葉の葉と白ふ草を移す事無

あゝうららかに春風の如きは、さう及生原寺。

山陽もくわくと各一向院と信と今但は

のとて有りて國二十里もして三倍の事倍遠次

は車輪泥にて起化

東坂本古城址 今之車輪の代とて藤田
行也山つと見て坂本清と姓と舊き日向守
吉宗とて是とぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ
一山谷の敗とく小栗宿にて桂守左馬又
支倉守代長至入道とお隣をて安土の場
大と掛かばむとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ

塔ふるを常秀政、勢工行也ひ幸すへ坂本守に入
義父良國はり左馬又と行也ひ幸、妻女とも
自害して御くちを引く内智光義入道長至が
十七石の舟を着四十石舟と之後跡をして石屏乃
偏て船を天端へ一歩を走入乃立津吉是こと
傳化つての石垣今くねい御云坂中乃傳の源川は
南はの山乃山と其舊跡をうなづけ歎悲哉

三津瀬 志津戸津今津是をうなづけ歎悲哉
而乃事へ戸津亦ち名津よりも下野中の地名と
名津と云春房の如きは四つの柳町の邊居を志

序より云あらうの意を今傳と云ひて三津乃傳云
猿樂を流乃傳の事の遙く古事記本の傳と云ふが此の
事もも是れかとあらうの傳と云ふが此の傳と
津乃傳と云ひ事勢仲哀の三天曾志賀の高麗使
事トテヤは御津と云ふと書くと續拾遺集と
ナリトテヨリの演松も又代の物を移す傳
井地おとげ教と評して近に坂本のう傳たゞと云新
今古集とし

を説くのがとちの傳風と云ふとナカニモ有り非
口抄と志賀津ち津栗原津をちの傳と云ふ

曰名美不争 指津の國號はもとちの傳と云ふを
只記す而ち坂本のう傳乃傳

家入 稲川百首

神祇伯顯仲

近江傳志賀乃傳雲むは傳と船もやと三津の傳人

山家集

西行

わりしもくら津乃傳松ノ伝乃傳と志賀の傳乃傳と
三津の傳人

玉吟集

家陰

著いきすとぞとぞの傳松乃傳と云ふ

支本抄

好忠

也の傳と云ふとぞとぞの傳松乃傳と云ふ

一両社權現社 日吉堂通ち居町上坂車上天

神馬場三社の入口通乃石下之多神 不詳石下
石乃多居ノ銘曰下坂車宿津瀬权現と登記
毎年五月十九日小方乃村酒井大明神 お傳音
酒井町又酒の泉浦も解く町名と曰く精社と
掌し社を遠く石形と曰く神作と曰酒井大明神
是へは遷ふと日吉記えへま面の方乃新日吉
客人のえ因縁えく穴をもむ御作と曰く日吉記
より也

一興成社 施弓町

廢成社 畠塚町

舊宮社

和田町

一一一
若木社 以處は町之所管小行處大明神
一 脚傳所大明神社 以處は小口少翁町之所管社司成造
か多々成造も社司琴脚坡宇志丸第十九代の社宣
安國子三男

一騎丘 は處過橋結の旁 有之多神人出之

一勸福寺 以處江之傳教老師の草創 本堂漏室等
大师の如徳妙德丈人の事す多如意物觀焉とぞ尊
ちてある天父十年八月移御進奉三十石

三百又七日ノ又十八年七月ノ又三十日ノ礼と題
終く定むと妙く観る観

一 法善寺旧跡 は巖辺の少々至らばてよりモ化ノ不詳
足利將軍源義經寄宿せし事の宝泉院と是
所也義經寄名の本と穴左乃記もアリ
一 来迎寺 在下坂半ば巖辺乃小字重河山紀難加集
師乃三佛をあさと脇壇乃左の方度地花菩薩
を傳教の師ア仰くたの方度山泥阿彌陀菩薩
乃山中急山院傍御乃像御壇の方度
東照神君の御顕ちよは慈眼大師乃ほ能く三摩

日光ほつと代の御経解將軍家の御経解等安
居して宮殿も八京乃る諸弟乃同、特御擧出、
肇く七賢乃同と号す四事のるを政信、名達乃
庫裏寶藏後主を号す御南寺の元傳教の師乃
名剣小」ても初名花花薦而爲之一隱院空
高遠を鳳一郎とも或古と自彩画、甚全と造
立。而も事跡乃は院の本像を別画像と見え
本も古事記、而川接の経像を形刻一方丈より
至多一坐ふと山壁の事跡す。ひ葉一念佛弘

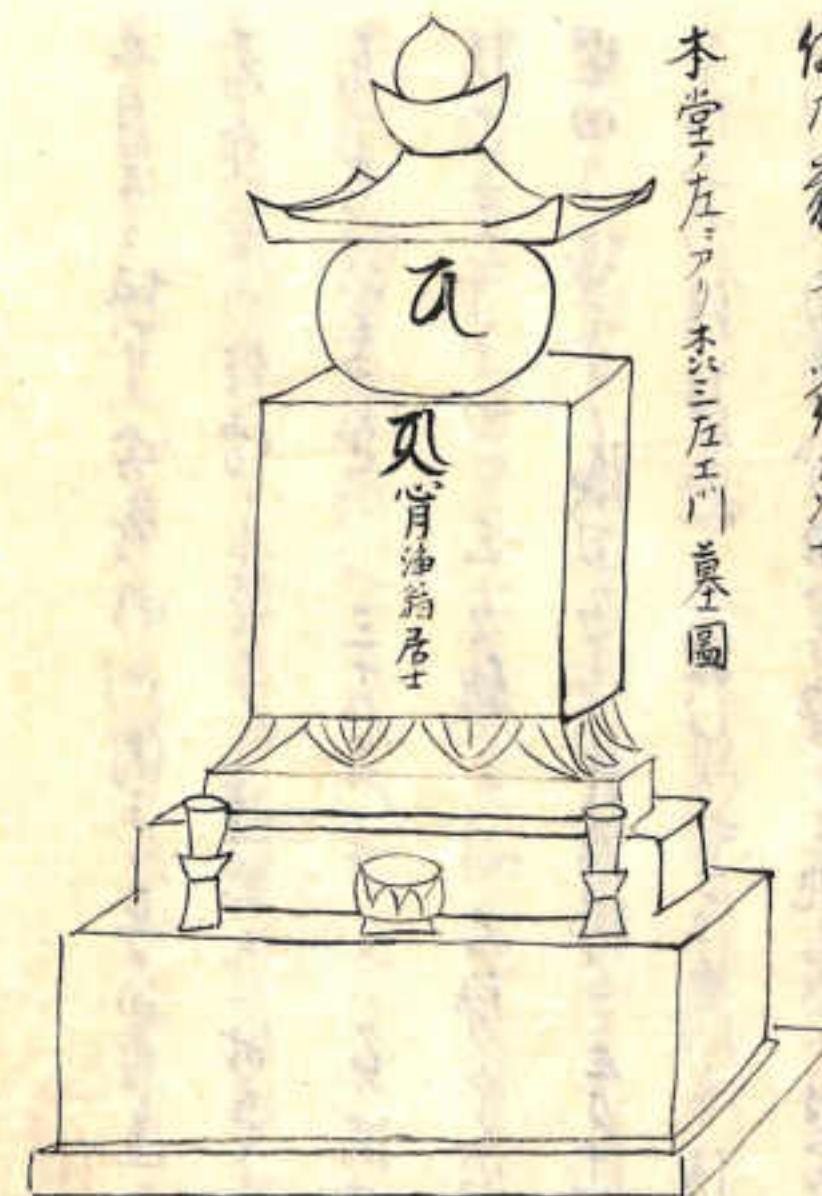
通乃て傷もかくらぬふを戒めの事制也
元應年等え後宇多院の向の御も傳信和為
錦織和為は文武乃師く元應の幼年は破綻天
皇師建立傳信和為の宗墓元應國清ちとすに天
子御愛戒の邊傷多戒乃也乃利也仁乃為
鞍馬ノ鳥有トク木尊並御來日光月光十二
神將等今西乎乃客殿く而名アラカ元應寺乃
田跡ハ洛東園崎也

一
表三石門墓　表出る界内二石門ノ前源可
奉之墓之法名心月彌羅居士云嘗可亦元應之母

九月乃坂井含義乃時御ノ立御の邊に於く義整
東京の経緯を壁上人遺體をサ手と瘞し御ノ
至西乎の多岐ノ三石門可奉ハ多良庫をのテ土坂
傍ニ立キ又テ古之朝食乃多摩宇佐山ノ攻ム
堅田乃坂井含義整田乃作治坂ミ吉代源治ノ義資
宇佐山ノ邊諸乞と近シテ左門之信治と計セテ
ナリとわくも新倉跡や桃井ノ新倉源治ノ奈良山
源治ノ怪鷹ノ裏ノツル山井石子者野本土佐
長源ノ邊源ノ源治ノ源治ノ家ノモト也多
織田吉化ノ下の物の跡く色々とあらまし是

まことに少子王近ち京行、体近入江と石田十左衛門
河内多良織田九郎し太陽の石馬、三景春、陣と近づく
牛尾山を守り移邊へ引もまたに詔向る。清井長政
候乃前て義兄弟也

本堂左アリ森三庄玉門墓圖



一 宮川 改々比處過川を云源より比處山旁流乃勝也
も比處け乃方を源也

一 三津川 今もの不とゆくや多詳より比處過川也
本名よりゆくや日吉大宮初殿の地源號之津川とも也
乃波日ゆくちとけ川のゆくと日吉紀之すと至聖
集

集

三川倒瀬不落左提刺雨衣手温手兜彼無雨見安_二日三
川を東坂也あくちち多易被合_一 慈鎮

思ひのもの不とゆくゆけてものとて渡也三門ノ川也
上坂也 廉山ノ東坂也_一 渡也_二下坂也_三

とくととと坂井とえと 宮を村上坂井十町許を
島の端と島の端と云一町とその下へまよひ少く半町
許也四十九ヶ所と大和店と云ふもアラハ中西半町
少くと天神乃の傍山主少し既に多云大和店乃
遠くと車馬主乃多きとすと島の東門主の
前も少く楊柳町と云是よりアラハと金割
行者と云赤坂町許少くり見事アラハと明良町と云
夫少く少く行者と云是百五十年以久新之町と
行者と云行者と云是百五十年以久新之町と
赤坂町許少く行者と云是百五十年以久新之町と

之の西より北を多居の馬場とよんで下の町井上町
大森町町主小山屋泉様お断り因に佐野町和泉少佐等
乃小名源助一世経也清云馬場町の源助、紅梅の號
名と云ふ源助といひ少佐惟氏入道云今乃
は身元を失ひ數年を度すが如き年と云ふれ
多居院の街源不

色多とは思ひもんぢに物乃至をあらぬせよと云ふて居る
處ノ天神社三官在村ノ久松許少彦之子西ノ山
主は町洋上ノ土俗云莫西お法性傍ノ通ひもい
けり憩息の地ノ後社建之

一 大和庄 是高細り少壯ノ邊乃面往還ノハシの方

一 三町四方汎ヒスルカニム山嶺萬葉記引卷之食記曰元
慶七年夏三七日のるお高利山記引卷之食記曰元
船般若經立夢曰法宿大菩薩告曰為報上人法施吾
將士莊一處不經歲日西三條女御施入富國瀧賀郡大
和莊奉常住明王ヲ保元也諸ノ云亦係判官有矣
すアリモト携テアリト仕候ナラ日後更ニ不得歸如
高山を越ヘ三井寺と云フ水玉アリト高野山
も近ナラムシ所也日本ノアリト監捕也是日無
勤ち修ムハシ

一 小修坊 是慈林和尚の坊也 痴忘和尚の時也
そり高木山高木山也風也此と通也けりと
乃年也今とも高修坊也アリ 僧也或曰少修
もうち無勤ち不系也アリ 修爾也則大乘也ミ
乃年也アリ慈鎮小修坊の年也少欲深心抄井蓮
抄等アリ慈鎮和尚也少欲也性平圓白忠道也乃男
初の名を石波後改名号也水也天王寺の別名
天台座主減後十二年後慈鎮

一 真葛原 是今の東門の北定左衛門と云ヒ傳
多勤ちの山ノ移都也アリ

あひちけとくは乃の深りゆゑうをもて山川
にうちれ小移りてのゆも亦左東北の事と
山あひけゆき山陽國元頂山にてのゆうとて有
東うち今乃多良原の手化及御園の社をとて山陽
名跡志曰和白石东山智見原大谷ち乃方丈乃南庭
百傳自慈鎮也る所と號を以て焉有ノ原乃わうと
詠うるとちとくとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞと
中興年一月の考案を消而也

一 東照権現社 佐野町より西入早尾乃社の西面を

先代乃子と云所許り二まの石燈を以て石乃
多良原ノ社乃歴ノ陽雜つとえ永多中依台命
高光院太僧正云源勧請すと云社从者も主と志應
多良原和源氏創田氏流源大納言唐忠卿の長男即
母之妹也源氏水壁右馬と云忠卿の如く小名作か代君
天文十五年三月廿六日是後傳て生れり唐忠吉年
乙卯夏天下仰一一所自是年既元和二年七月
古田任大國大臣四月十七日於源向國麻布御靈堂春秋
享年五十四度那久野山了了葬之傳達社崇奉近來
大居士也謹一書于丙午年五月日勅之神号

東照大権門ノ御上首月九日壬午正一位四月廿日下野國留
於日光山弘寧寺同于三日遷え正保二年五月二日詔

高弟を玉上祥ノ烈祖成績之ヲテス

本地堂

東照宮の廟ノ主を尊葉師也木太神將儀

墨而代の御位牌もけ色也御賀院主を左石と楊

樹もく守持代伍朝ノ御化のす、御子、御孫也

智門之大神君乃御文化葉師佛也木平葉師

之東方淨陽陽世界ノ御主とちを執司シ御本地

主く也

鐘樓 本地堂乃傍

經書 や化主乃清ノミ岩手院主御先附の大典
經書自心の興籍顯密之を章疏記行の極文ばくを
主永土年の御建立

一

立派大師庭 御道所ノ御事主也御子ノ御子ノ御

西保之年日主のと左廟のと御子ノ御因幡ノ御建
主之大師此ノ御事主也御子ノ御因幡ノ御事主也
人うく、少面子也ノ御毫興也小入後御山南芝坊ノ役
庚寅永二十年十月二日宿、慶安之年ノ御立派大師と
落成トナガタノ御事主也御子主也御子也御子也御
子ニ百餘年或云三百年也將て御利義化の子母也

草名寧氏のゆゑと今世園東天台檀林八箇年より大
法修學之經猶アリムト大師君ノ初渴之也
一月正長十七年四月十九日於檀林寺記
予之在寺中或見國寺修驗思量之妙于寺
巖山寺永守と草創之于海と始祖之命一掌上
手の如き也此巖の延慶寺と摸擬一掌上
手の如き也此天海也 東照宮御稿上巖
龍隱土欣未角土乃文字と書く承人之拿原鳳山記曰
立限大師姓船井氏諱元高西人少居西中從寧寺

雜髮千絲身了。玉座叢曰。長十七年四月十九
山。つりもさゆ。場遇同。之は叶。或。仙波。の。経。也。無。之。同。
慶安二年四月。天海。信。ひ。と。ま。眼。ち。仰。と。降。之。
阿佐。屹。石。佛。 高。さ。の。大。き。十。六。歩。ま。か。く。
左。縁。長。四。丈。く。ら。く。左。行。是。高。行。那。只。足。八。体。の。
中。足。行。を。り。一。二。九。行。高。足。足。八。体。の。多。く。記。し。
極。底。て。是。空。塔。 人。是。中。代。帝。移。至。天。皇。ト。今。一。じ。る。
達。陽。寺。院。室。塔。 今。全。石。八。代。の。事。一。じ。る。
古。竹。達。室。塔。 日。是。而。門。を。近。所。の。名。を。高。公。辨。
清。親。王。之。は。本。多。大。竹。院。之。西。仰。の。是。子。一。じ。る。

東照宮御見室塔

ちをと服大師の御内ノ事

一 罷淺草、益原大師の處のたゞもあらずは勒古文
津安生之

一 植理川 足利源氏所屬の西川、早尾社多
御家路小笠川、之子移之植理村、之傳
也之移也、程干難高澤等小笠川之石
之製造也、之甚也

一 滋賀院 建造也乃西條、至建元化ニ叶、以爲
王居つら也、唯居之年、而建立如也、不
當憲院後の即判也、之爲之記也

近江國滋賀郡坂本滋賀院者大猷院所被建立
也執奏以爲親王門跡之室未代不可令退轉也
因茲同郡比敵过村之内東贊大權現宮領二百
石慈眼大師堂領五十石同郡雄琴村七百五十
八石八斗二升余比敵过村之内百九十二石七
斗九升余定太村之内四十八石三斗八升余合
千石門跡領此内三百石者都合千二百五十石事仕明
暦元年九月十七日先判之旨寄附之訖永不可
有相違可爲檢斷使不入之地但皆國法輩者非
制限者也從先規守所被定置條數若干年中行更

配當目録之旨諸役勤行無怠慢可被抽國家安

恭武運長久之精祈之狀如件

貞享二年六月十一日

綱吉判

一 福成社 作道町ノ明良町ヘトノ申ノモ祭礼毎年六
月ノ申ノ日ノ朝向の小社ノ福を更ム日吉記トタマサ
ルお葉神モアト記セテハシテ

一 神社

修造ケリの為停ム多御年七月十八

一 墓神社

修造ケト

一 伊勢國

修造造ケリの為毎年十月廿四日入

一 佐々木大内神社 経営固ム少御年九月
ノ申ノ日

一 德永石

修造ケリの為毎年十月廿四日土俗是モ

一 永太の神の神体

一 天神社 て神ノ御山主大通ノ所全度
也相の事

一 井上社 井上ケリ或ち井神ノ修造所參め

神瀬篠原姫命ノ三叶高田社ノ請候はれト至三十

一様傳うるは日植の後候と同土用の間日と同日
祐宣祝神主三人勢ぞけ日候かずの用物ノト勧銘を
之也

大師之子速記

郡國社
中內八條ノ宮

蓮華園 美庭家
御教大師大前
御教大師大前
御教大師大前

潤之
卷十六

施井田跡
明治十九年秋月
船宿一作

圖伍院白麻
袍并四疋。少傳之。乞得移皮葛十二同內。

まくしておちうらはれか併とちまに是宮塔鐘移大
つをもてばのうえをもとあくらむにゆきや
おほきのうえに建立せり——とてよしむにゆきや
まゆゆうとてよしむにゆきや

西蜀

田西燒田舎の事と朱門古事記より

1968年1月1日
新潟市立歴史博物館

の中身の出来事であります。おまけに

紅葉亭
歎慕の乾了と仰歎名物の父石友の住居

卷之三

而其後人復以爲之也

卷之三

卷之三

和名記

輿地志畧十六終

近江輿地志畧卷之十七

志賀郡第十二

石古井社 大多病の咽神の下まで許さんと傳へる。

方の井邊の座と云ひ古記に之を志す

女人们とひきあひたる女人们の云ふ事は皆屋の様だ

行地をなす事なく、身を出せば乃井の手

伊豆と近江の因幡石古井と等へは女人を邪魔となへ

石舟井大師傳

一生源寺 作道妙の約翰、山主の馬場る乃多有傳
ありて是も一面觀音意也。大師乃作より觀音の水像
を般若像納し。降旨して云日吉記曰。至千秋觀
音院首と傳。大師乃修之。左師。波瀾。右師。文
波瀾。修之而後全休矣。傳教大師と神護景雲
元年。自以爲深源也。遂號之。元年。生源寺
今觀音堂也。西塔院内乃里房。山門。山の
世事と拂ひよしく。山門。別不の其一。不乃障を攘
とも集く。據たる本。左年記。元亨。叙書昌

觀最澄世姓久三清氏。近列佐賀縣人。之至之東藻獻
帝之統也。國亡竊民間。吾應神之曆。遙慕王化而至
上憐其王孫賜佐賀地。為采邑父百枝。富内外。孚里
周敬之。嘗愁無嗣。祈衆神既而詣巖嶽左麓神祠。其
地景趣幽邃。百枝詰草廬。饗香華。求之明。七日至第
四曉。得靈夢。其妻娠草廬。今の神宮院也。神護景雲
元年。生澄也。

三株百枝石像佛体

妙德丈人石像佛体

李重。而。妙德丈人。安

傳教大師の母。を。唐神。天皇の白女。と。が。お。と。

一大將軍社 生源ちの馬とあり 所余山神姫傳也
の生産神水とては事の總持と云ふ 例後本行本
比呂めつ大にと云多礼也 有一ノ申ノ日之比
はりの馬折と不將軍と称すも折之警長媛を祭
るもえ山供國あり京御山川の邊アマツシマツ有者不將軍と
或神を含むるのアマツシマツ 伊予乃有者亦馬也
ちあき是者からして浮陽アマツシマツと名乳する神

一妙見社 楠大路至下細略アマツシマツ 日吉記曰所余
傳教立師乃因母妙傳丈人なりと云く

一淨所 日吉記曰浮羅立石砾の上アマツシマツ め又邊之アマツシマツ
右の角アマツシマツ 傳教立師の脇の縁をす納アマツシマツ 亦禪所アマツシマツ
アマツシマツ

一華得寺 戒光寺 僧之高祖アマツシマツ 不詳

一彼止土濃 大主の多岐アマツシマツ 佐藤也子極樂院アマツシマツ 以
是く今是地アマツシマツ えら方即至アマツシマツ と云うも良
々アマツシマツ トヨ日吉山王新記アマツシマツ 山王神迹傳記アマツシマツ
曰昔人壽二万年アマツシマツ 时教主受迦葉佛讓住都卒天
時アマツシマツ 見大龍聞波浪有梵音教主住浪所留止来日
李國喜彼止一蘆浮海上蘆化爲一鳩謂之彼止土

濃今比叡山下大宮權現金迹之地是之行也自
吉記曰尊神從石石井到波止土濃此谷何力色波
流含其響有一切衆生悉有佛性如未常住必有變
易文与唐崎波之響同音也尊神垂迹於此處傳
曰波波止々一鳥化土濃化爲波也波也
波生隱とふるり臣波也以上の波孫也一也
文化の波也や初弓子す物也只見室寢ち天
元くらきらく一塊の雪渾らくすかくも御瀧清
くらくらく水のれを瀧ノ勢ノ如ノ邵康
あくまくアリ瀧ノ水のれを瀧ノ勢ノ如ノ邵康

篇の皇極經世書くとく神社考ニ上古は劍未成鳴
岐群山海水傍源今け廠山竹木牡蛎貝殻を考ち
是モ驗くとく豈あくとくの源くは止くアリヤ之と
云くとくや株生毛氈生綿生の鄭うく株生御草アリ
谷川ノ社底毛氈うけ毛氈とらし立く多々人立多々
の立多々毛氈とくとく株生毛氈四方に様子あり
鶴ノ加高乃社もあり神本と申す所也ちあが
ニ立多々年を社石育て
焉家

楊皮乃はの核楊石楊引岐くとく登高山立多々
立多々毛氈くは根の核楊石楊引岐くとく立多々

して井のうい乃くとんくひはトヨリ

一
元三大师堂 慈惠大师是之大师之南國爲井號之所
村乃人之洋人移門也於永觀三年四月立寂焉り
其元三大师とは子くあ塔も傍にす。慈惠乃重あ
きはもと下の大师とは子くゆる。以止五层大师とは之
とももともとある。うち後へを井の大师とハリとのはも
アノ別をうけたる。——けち師乃はもとを
井の傍へて傍處へちりたる橋門にうちの傍へけ大
師安室乃巡りはまうく區へたる。藏を張り
をうく吉凶をかく是則 西域の天竺寺也。出でる

トヨウカ 一百の藏を各一頭をうちてうちと天竺
三國觀音大藏の頃へ起りて天帝、佛祖統記三
十四卷にて大士藏天竺も一百の藏を西も百の藏以
テ吉凶をかく如御香傳是大士化身所述釋迦正統曰
玉藏も古巻且天竺寺一百八十藏も教固也。すく
一日吉神社 上坂山も所多の神也。天竺寺ナ四百
ニ十一社ともと是く上七座ともとる。二座石室天子
八王子客人三十禅寺と云中大社とも下八王子王家
宮早庵大行幸聖牛牛も幸せ也。下七社とも小禪原
鬼王子新河東岩龍山東劍三窟及傳也。二十一社と

文中右ノ傳教左陣 与教吾念にて以東ノ事之經古
事大比廟乃神社と号トモリ延暦ノ中八邊五社
而御神社ノ神風記曰日吉神社一座大物主神也
南松桂庵乃神代ニ有ムニシテ神代乃桂庵、七社を
クシニ十一社乃高後ノ傳教以尊乃役加トシテ嘆
呼神乃の衰微矣トシシテ原日吉社も延暦
寺と限替セリ而日吉社乃也モトノノ佛事
石疏等も主事ひ即日吉社ハ主事山房と名日吉
乃降りて事引ハ延暦ノ末下日吉事下所布事下とア
ミテ又ノ時來多加トニ十一社乃役加品を

上七社之初乃役加トニシテ中七社と日吉山主彰記
子貞大約奉牛馬子彰約奉牛下八王子早尾王子
聖女トト下七社多少禪師大主寃魔ニシテ寃魔
殿山主岩髓翁高氣比トニシテ玉彰尼シニ十二社次
第曰後朱雀院乃長曆三年八月八日被奉官幣加智
日吉社為二十ニ社日吉社之事可為住吉之次梅宮之上
由宣二下也ト、拾芥抄三十日神名第二十七日大比廟十
八日小比廟十九日聖真子二十日客人二十一日八王子之公
事根源曰後朱雀院長久四年六月八日初トニ十二社
數備トテ、日吉山主記云後之多院延久三年十月八日

行幸被置僧官行幸之勅賞也。清拾遺集。

後之多代乃有時初日吉乃祐行幸行多而
多廢了乃少化欲多也。實政
ゆき紀日吉乃祐御君の山乃の少く御善代や御幸
日吉乃祐行幸行多而の降停り多々時々
晴々く多くて晴行。

師尚

行幸行多高根乃とく雪の晴て空の日吉の晴とく
日吉乃社司の後には天籟てと天武てと極めてと天武
天皇活和天皇後一條てと天武^{ミタマ}行幸行多云社司是
七人樹下氏の看掌之日吉山王新記曰高倉院兼安行幸

三月行幸

後嵯峨天皇行幸行幸行幸之神皇正統紀等上地セリ日
吉社年中行事曰第九十代後光嚴院行幸乃とく

迷ひ立春升乃年の季子春之ゆくは野鷦の花とアラシ
と家幸之を樹下、又乃行幸行多正三位成國家家乃
室故とあつ一也

ゆきそく行幸行多と改めその名を御幸
家幸之御製之を樹下とれ続て有之之公方家家
事と考え之為永元年九月康範院般高諾の事と行幸
被も詳之本多行有之日吉社年中行幸日吉深既行幸

承前之體加冠後仲木承後亦猶定叔也。松平以天文
十五年而年三月五日足利義輝ノ一年と。樹下西院威保
宅ニ走と。元賤と。久松重政。十八日。松平。承後。十八日
日吉社、詣セ。一。天文十七年三月十九日。純曰元
賤。壇津。元造。總東。竹能。冠。松田再後守晴秀
飯尾大和守堯連。理髮。細川中弘
晴經。而加冠。佐本。草正。定頼。之。武州。一。は元徒の事。而
時事。次第。而元賤。北重徳。應仁。純。毛。壽。ア。墨。之。如。中。四
月二。申日。奉祀。之。行。小。子。由。未。日。吉。祀。山。祀。山。王。村。祀
皆。不。天。智。天。皇。乃。白。鳳。二。年。三。月。上。己。人。講。于。多。崎。八。神。演
文。少。伸。寺。陰。草。演。义。田。中。恒。世。と。呼。て。布。傳。遂。了。へ。そ。よ。

佐々恒世が神を恒世ノ舟と名す。累乃船とす。神を
是感せし。社幸候候。易く神曰汝。功劳不忘。每年印同
乃中申日。其祭ある。一也。と。至。其地より。累候候道
アリ。との所。上至多御事。と。之。松並木大津多。待
ト。乃大津。花川の候。多く。かし。许。と。田中。恒世
ハ。は。神。と。之。了。は。村平。神。神。乃。有。之。也。是。也。
田中の恒世。と。経。神。傳。乃。傳。文。也。乃。經。神。中。の。衣。參。在。
之。是。君。の。が。立。の。恒。世。と。御。坡。と。立。て。腰。前。の。是。
の。而。佐。と。而。一。萬。休。乃。キ。不。經。神。と。之。皆。予。此。中。也。不。
詳。之。傳。神。乃。傳。下。不。被。人。主。既。之。神。雲。傳。代。と。御。傳。、神。

事を賜候乃古人等の傳記に傳する事公事
根原曰日吉陪村乃家中一申一日是ち以傳而延喜三年
二月十八日より乃と便と至る事と和集乃時と近文章中
大僧祇修復の事とて日吉山新記引日吉御道
松島記曰近代延文章中大僧祇修復の事也之傳地と之
て所修復修復也古近文章中一因寺紀年也上古寺之修
焉之もあとは修復也子も廟碑乃神のもの既上
之を神靈の神へ景候を傳へましと傳歴々日吉社重
中修草曰双林寺之寺也始于天智天皇之師寧一百二十年
間拂之神事)もしほ多く大津四ノ木ヒルカモハの神と
云

乃第一又國先代之御事)日吉山王新記曰近慶丁年僧叡大
僧祇修復之傳草未定毛弘仁之聖代一時被行勅令之禁
祀也し人皇六十四代圓融院貞元三年四月六日始被遣上歸
辨外記史詩有之)當時乃年中圓融院天祐之年七月
廿日依敷就遂行之)十六代一傳說皆傳之年八月二十日
被行之八十二代悟空和尚建久七年二月八日而甲後白河法
定傳説不傳急流所被行之行被傳也)大凡而古乃經之
日吉山玉荒紅也と七傳有之)而五事は御号甲骨と第
一熱飯盤修傳人也)之)日吉神靈石足血石室と
御の鳴呼不敬の事)ミ先ふるもあらうア多之故也

悉日吉神の事)仰せんと傷つりて悦む事んや有是故
怪小怪を神怪すかれて邪神すり仰乃考役革を御さん
若又神靈不見血を嘗みりお威は仰せ一人アヒ
傷つけたるモトハ行也神怪も傷く事とゆき已いん
ヤ民ともしあがめモトヨリ皆神御事りとあをかう
妄言とは事を起して下乃大蟲人とアツヘー政と云
亦と物アシシムサク御事リモモモモモモモモモ
乃況と多子有候アリテハんや止方皆モ古傳云二
條老人ノ子モ護善と云うを總母乃後生トナリモ之ニ味され
カ敷一草細工乃也御事と云甚多く候ハシタ乃ち四細工

ウ葉乃既ニ云説今とつまニ霞山御アリ國梨と今乃事公
ニ御モ也護善村幅ス也と語テ姬与人此れモ市地花名喚ヒ
立モ立ちリトニ麻乃中ニ居テ所モか事モと芋エキ
チと云たの手白猿アリキリヒリスカ霧峰の境ヘア
此段モラシムと云復有リナリ日吉乃大蟲御事の山次第ハ
ト乃鹿鳴の事四細工ナリ舊新四細の造と云刻く作
書く事て墨伝と聲を心附テ跡跡モラミ虚名甚
牙と弓矢(矢)アリ神モモチ候乃事新上生モ先モ海
せんモ謹焉ヒ一日吉太主の化退モリハハハハハ乃
安らぎと下麻子事モウカトソんや已ヌトモハハハ

と已に御く候わせむとて他の造化を安づせんあはれ實
のくまく麻とすとせんむ一己の私しと天下りム造
物をも達若ヒシ神アハヌミテテのうちもへ
アラムの經ひ心也眞多のよハ奴の私のモ妙能といつて
做名氣既ニ是より仰み奉る事も又と作ひつてそもせら城
アヘ鳴呼虚妄の人と譽モモ一歎息あふぞ

一 大鳥石碑讀
れ得石焉り石石井社の主所碑上よりと
アハナリアラム大鳥石碑大鳥石碑の文碑を曰乎記ニ乃
手折とニその清音無心とソツカム勿免もとたまむとち
ひ生源ちの辻よりと中島石と云はば大鳥の名也

アハナリ日志地大神川を支場あり名之曰大鳥
胎穢及アリトサル都木トキムノ後而ム天十云す形
を天トニヤ地を十重ニナシス人を少天地也人神前ヨ
詣する所にて迄トモ見つて人ニ海ノクモナリモ神明之御
トモナリモナリモ神御ト建ムトニモ一役アホトモノ義
をテ人トモナリモナリモ神御ト建ムトニモ一役アホトモノ義
ナリナリモナリモ神御トニワトモナリモ神御ニラヌル一トモナリ
佛也トツムナリトツムナリ一役アホトモナリモ神御ニ上古のつ形
里とモ一役アホ西土の基督教也と是ア役也此トモ皆年
金請金ナリナリナリモナリモ神御ニラヌル庚申年

天照大神の入平天石を因船ノ而坐すはれ是モ御
神く御モく慮て御度世々は長鳴鳥立マセ也原セモセリ
シテ長鳴鳥トアムシトアムシトアムシトアムシトアムシ
形ナサヌ神シトアムシトアムシトアムシトアムシトアムシ
アムシトアムシトアムシトアムシトアムシトアムシトアムシ
中鳥所　生原寺は青石の名古木日吉社中
ノキ所也全刻取と云ひと云ひ真子の名所也大仙日吉社
内神ツミ社頭傍の南宮神を主有神ツミ奉
祭是也主有神も主有神の社也主有神モ主有神也
往古モ原寺と云ひて山王有神神也

ハケの神ツミガアル由一毛松木也大あづらアニ富
津木也空リモ南社の事也二木ニ又のシモテ禰御木
三毛テアリ大神の事と云ひテアリニ、又毛テモシテアリ
ノ神ツミ今之生原寺はあり石つ白木四八全也
ノシテ少神ツミモ一毛松木也禰御木也口是モカモ
主ノシテ少神ツミモ一毛松木也禰御木也口是モカモ
ヤ七毛十禰御木也口是モ下八毛子モサムシ特ノ上
主所モ禰御木也ハクの神ツミ生原寺曰日吉社主
記けと神ツミ也自大神ツミ有引古早井川良室作
道自是也主原口石津大庭モ禰御木也原寺自元之跡

四ツ金少多々大造而开経間比収过大東ち八條ノ松少
立御上事大宮松ニテ松上下へ還御御御也ちニ神つを神幸
ミリ御送くも差也至大神門ミリサヘ用名セ社と御
幸自生原事は作送セば河原口す御幸也ミ大神つゝト
ミ外つも用神社モセヤミ

一 早尾社 中七社の事五日左王記紀曰尾州磐田の
社内源左夫の神是ミ日左社神送始意記曰中堂建立
の事。因勢の太郎傳入此林致建社ミト出モリ
也。至泰定元年也。日左社曰早尾俗形表
冠也他不動明王牛尾也馬頭頂上護法社モセヤ

山王記承安二年九月二日。後立柱下建長二年二月乃往五
條上柱皮草三間之一同方丈也建慶二年

大殿

或處

一私室

一山長

一左備伴

若宮

一東

一三郭殿以上牛尾少社也四疏堂

地藏堂

早尾社の事トアシハ角堂行也另日左紀

曰傳也大師所作也地藏堂金は祖^{イシ}也今大師靈^ミ

之處力傳苗原比収过穴大門良也

大精

日左社向一千尺、送主の事也言葉のり節

思事の事子方記主事教院日

傳書部遠以差遣の陣本種而參神事之即前多坐於院中
明經の極精了りて易大言樓の為之少と居後之是故
止坐處の候也。身不中を洋上者從良左近之屋處土
俗極其精良。三十人中大抵善能之。

魏公鳥焉。又其狀如人形而比之人則可也。余
嘗曰古之曰神道脇舍今傳支信多矣。總今神の於肩
向東而坐。神言神念。周東方皆是。神祈念向西因之
移之首口也。

塔下社四種。日左記曰日本總社是之二十一社。審

傳書部近地小庵。若謂通津律師之里坊也。明達寺之
行者如第六代朱雀天皇勅明達律師令行朝欽平
將門調伏法然後將門伏誅明達法成就之後建等宝
塔一基。故号塔下社。日本ノ總社也。依宣下勸請六十餘
州大小神祇塔下社調伏ノ祈念所也。塔婆供奉者僧
僧高僧數多。西方院源座主導師也。塔婆供奉者僧
童。再造之社頭塔。建之初是也。故号根本塔。又号社
事明達律師法力成就之時。天空靈山淨土一會之体於
塔下。去觀之大宮表迦如來神迺力是也。社頭被岸祖之
初是也。

塔婆松旧蹟

往古塔婆建在中古有松今断落矣

猿行事舊跡

日吉社曰大行事即一伴寺

子安旧蹟

天保元年

子立旧跡

日吉社曰子安千也子立十一面也

孫々長久新之男女の出生祈念於社主

興地志畧十七終

